50

『体雅』の編纂と諸本の関連

浦山　きか
北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

『体雅』は，丹波元胤（1789～1827）の撰した人体部位名称の辞書であり，医書や小学書等より広く用例を引用し，考証を加えたものである．

2010年の医史学会において筆者は「『体雅』10種の諸本の関係について」と題し，「日本古典籍総合目録」所載の国会図書館・京都大学附属図書館・京都大学附属図書館富士川文庫・早稲田大学附属図書館・東京大学附属図書館・東京大学附属図書館鶚軒文庫・東北大学附属図書館狩野文庫・大阪大学附属図書館・前田尊経閣文庫・無窮会平沼文庫所蔵の諸本を主に，台湾・故宮（故宮本と略）と北里東医研医史学研究部（修琴堂文庫所蔵，修琴堂本と略）の抄本を加えて考察し報告したところ，他にも『体雅』が存在するとの情報が，内藤記念くすり博物館と研医会図書館より提供された．前者所蔵の『体雅』を大同薬室本，後者を研医会本と称す．さらに，日本鍼灸研究会の竹内尚氏に国会本と故宮本に関する情報を提供して頂いた．

そこで上記十四種の『体雅』の記載を比較し，編纂の経緯と諸本の関連を考察した．

尊経閣本・富士川本・国会本・無窮会本と故宮本・修琴堂本は，『体雅』の成立過程を記している．修琴堂本を除く諸本には，巻一巻末に「文化十一年甲戌孟春起稿，至于明年菖月使及門木由賢謄，次是月廿八日再訂　胤記」「文政壬午夏五月初九日再重訂　胤又記」，同巻三巻末に「乙亥菊節覆訂　胤／壬午五月十日刪改　胤又記」と記載されている．修琴堂本は巻一の一部のみの零本で，「乙亥」「壬午」の記載のみがある．他の八種の諸本には成立の経緯に関する記載が無く，書き込みや蔵書印により当該抄本の由来が知られる場合がある．

朱筆のいずれが「再訂」「再重訂」「覆訂」「刪改」であるかは一見して知り得るものではないが，記載の異同から，『体雅』成立の経緯は以下のように推定される．

当初，巻一に百七項目，巻二に六十項目，巻三に七十項目が選ばれ，少なくとも尊経閣本・富士川本に記された．これが文化十一年（一八一四）から翌年，起草から筆写に至ると考えられるが，元胤の原稿と見られるものは伝わらない．まず，巻一に二項目（天中・巨屈），巻二に一項目（膀）が頭注として付加され尊経閣本・富士川本・故宮本に保存された．これが「再訂」の一部でこれに基づき二百四十項目を保存する京大本・無窮会本（正しくはその原本）が書写されたと見られる．その後，再重訂・覆訂が行われた．巻一の「耳垂」の見出しが乙正で改められ，校訂を反映して国会本が書写された．ついで巻二の「三宗骨」を前項「八髎」に含めるよう改められ，狩野文庫本と大同薬室本が記された．この時点ではさらに「刪改」が加えられることは想定されていなかったと思われる．巻三で「髓」を前項「脛」に含める等の「刪改」があり，少なくとも尊経閣本・富士川本・国会本に書き加えられた．「刪改」を終えた時点での項目数は二百三十八である．校訂結果を反映し，成立の過程に関する書き込みを省き，各巻頭に「東都　丹波元胤紹翁　纂釈」とのみ記した決定稿が東大本である．

このほか，書写の状態から，大同薬室本は狩野文庫本か近い抄本を書写したと推測される．また，他四種の写本（早大本・阪大本・鶚軒文庫本・研医会本）は，東大本を基に書写されたと考えられるが，注釈の類似に加え，いずれも巻一の頗～眉に当たる数葉に同様の乱丁があることから，これらは相互に近い関係であることが考えられる．

諸本はさらにそれぞれ校正されており，『体雅』最後の書写が，鶚軒文庫本の明治二十二年まで下ることは，当該書が現在に至るまで随時その重要性を確認されてきた書籍であることの証左と言えよう．